

「意識」と「行動」と「でんぐり」と

看護職 星川 みつこ

奥様を白血病で亡くされ、経済ジャーナリストから医療専門のジャーナリストになられ…、その過程の中での貴重なお話をありがとうございました。

奥様が白血病になられたときのお話では、埴岡先生や息子さん、奥様の立場になって考え、とても胸が苦しくなりました。

私の母は私が幼稚園の時に乳がんになり、手術をして治癒しましたが、私が中学3年生になった時に、また乳がんを再発しました。

あの時は、自分の母がいつ死んでしまうのか、家族が死の直面にさらされるということはこの間にも辛いものなのかととても悲しかった時期がありましたので、自分と少し重ねながら聞いておりました。

埴岡先生の「政策に働きかけ、実際に動かすことを重視しています。仕組みに働きかけるボランティアを意識しています。外から批判したり要望するだけでなく、実際に手伝ったり、代案を出したり、担っていこうというスタンスでやってきました」という言葉をみて、とても感動いたしました。

人は、言葉ではどんな理想でも簡単に言うことができます。しかし、そこから行動に移すことが難しいものだと考えます。そして、また理想を現実にするには、もっと難しいものだと考えます。そう考えた時に、埴岡先生は実際にご自身が奥様の白血病を経験したからこそ、このような素晴らしい意識行動に繋がるのだと思いました。

埴岡先生の最後の問いにあったように、「でんぐり」はどう起こるか？どう起こせるか？を考えた時に、私が今まで生きてきて「でんぐり」があったのは、母のがんをきっかけに、小さい頃から母の姿を見てなんとなく看護師を目指してきた思いが、「看護師になりたい」「ならなければならないのだ」と思ったことでした。

自分の大切な人に対する思いが「でんぐり」を起こすのだと気づきました。

そこからまた「でんぐり」があり看護師の資格取得をし、私は今、助産学分野を専攻し助産師の資格を取るために勉強中です。医療の道は選択肢がたくさんあるため、自分はどうしたいのか、人の役に立つためにはどうしたら良いのか考えやり続けていることで「でんぐり」が増えるのだと考えます。

これから助産師になるにあたって、理想を語るだけでなく、妊婦さんや児、その周りを取り囲む家族に対して働きかけるために意識行動し、あるべき姿になるよう励んでいきたいと考えます。

そのためには、物事に真摯に向き合い「でんぐり」を意識していきたいと思います。